
冬の出来事

勝目博

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬の出来事

【Zコード】

N4719D

【作者名】

勝田博

【あらすじ】

スキーインストラクターの山根に起きたこと。そしてその結末は
・・。

眩い光が目に突き刺さり、私は慌ててゴーグルを下ろした。太陽の陽を受け、見渡す限りのゲレンデは光の踊りを繰り返していた。今日は雲ひとつない空。空気も透き通り深呼吸をすると、鼻の置くがチリチリ音を立てそうだった。

「おはようございます」誰かの声をきっかけに、皆が挨拶を交わした。ロッジの前には20人ほどが並んで待っていた。赤や黄、緑に紫。

思い思いのスキーウェアに身を包み、私の登場を待っていた。私はここでスキーを教えている。地元であるが故に子供の頃からスキーに親しみ、学生時代には全国大会で準優勝に輝いたこともあった。優勝でもしていれば、今とは違った未来が開けていたかも知れない。しかし私は今の生活に満足していた。25歳で幸せな結婚をし、翌年には娘も生まれ、今年ようやく伝い歩きを始めたところだった。夏季には両親の農業を手伝い、冬季は好きなスキーのインストラクターの仕事をしている。不自由はなに一つない。今回もそんな私の元に、様々な地方から生徒が集まってきた。5日間で1レッスン。月曜から金曜までがそのレッスン日となり、生徒は近くの旅館に泊まりこみだ。土日はフリーのレッスンがあるが、ほとんど遊びと変わらず、例え1週間フルタイムで働いても、妻は文句一つ言わなかつた。

「皆さん、おはようございます。今日から五日間指導する山根です。よろしくお願ひします」皆の前で挨拶をすると、どこからともなく拍手が起きた。今回も若い世代ばかりだった。年配に教えるよりもはるかに楽に感じた。全員が初心者であるが、若いゆえか動きは皆活発だった。そう、一人を除いては…。

「痛い・・・・・」どうやら足首を痛めたらしい。私が駆け寄った時に、その女性は足を擦っていた。

「大丈夫ですか」私の声を確認すると、女性はゴーグルを外し涙目で私を見た。唯一、動きの鈍い生徒、それが彼女だった。私は彼女を背負い、ロッジまで連れ帰った。他の生徒は助手に任せ、私は彼女の靴を脱がした。足首は僅かにだが腫れはじめていた。大したことは無さそうだが、レッスンは続けられそうにはない。私は旅館に帰る事を薦めた。もちろん送らなくてはならない。それら全てが仕事でもあるのだ。四駆のジープに女性を乗せて、エンジンを掛けた時女性がポツリと呟いた。

「ごめんなさい」消え入りそうな声に、私は一瞬動きを止めた。

「気にしないでください。良くあることですから」私は俯く彼女に出来る限り優しく答えた。

「わたし・・・」彼女の声はふかすエンジン音にかき消された。

「はい？」ロッジからの斜面を下り村道に入ると、遙か下に街が見えた。

「いつも、そうなんです」女性は俯いたまま。

「何がですか」街まで続く村道は、深い林の中を進んで行く。雪のない季節には2車線になる道路も、今では両脇に雪が積もり1台通るのがやっとだった。それでもこの時期スキー客しか来ないため、不自由したことはなかつた。

「動きが鈍くて・・・」忘れた頃に、女性は話を始めた。それは言つたものの、確かに女性の動きは鈍かつた。

「大丈夫ですよ。でも、今回は諦めたほうが良いですね」足首の捻挫からみて、レッスンは無理だと判断した。やがて遠くに唯一のトンネルが見えてきた。これを抜ければ小さな集落があり、道路も除雪されているはずだつた。

「どこでも、言われます」女性は話を続けた。

「良く参加するんですか」何故、そこまでレッスンにこだわるのか、私は不思議に思つた。別にスキーが出来なくても、生活には困らないだろうし。何か特別な理由があつても、はつきり言つて、上達しそうもなかつた。

「今年はもう、3回目です」ジープはトンネルに差し掛かった。遠くに出口の明かりが小さく見えた。私は前照灯をつけてから答えた。

「……ですか」なにやら寒気がしてきた。

「どうしても……明るいと……」女性の声は徐々に変化を遂げ始めた。

「は？」思わず私は女性を覗き込んだ。

「太陽に弱いんです」そう言うと同時に顔を上げた女性は、もはや人間ではなかつた。目は釣り上がり口は裂け、髪はひとりでに逆立ち始めた。そして私の首に手を伸ばしてきた。私は慌てて車を止めて、車外へと転がり落ちた。その者はゆっくりを車から出でてくると、私の後を追い始めた。私は必死に出口の明かりに向かつて走り出した。その者は走るわけでも、歩くわけでもなく宙を彷徨い、私の後を追いかけた。

悲鳴のような笑い声がトンネルに響き渡り、私の身体を包み始めた。風もないのに雪が舞い始め私の視界を奪い始めた。私は心の中で妻と子供の顔を思い浮かべ、目の前の雪を振り払いながら出口に向かい必死に進んだ。肩のその者の手が触れた感じがしたと同時に、私はトンネルの外に転がり出た。振り返るとその者は元の姿に戻り、陽の当たらぬ場所から、じつと私を見つめていた。寂しそうな表情の中でも、目だけは何かを訴えかけていた。私は太陽の光に感謝した。

そして集落に着くと知人の家に転がり込んだ。それから私は、仕事を変わり都会へと出てきた。とにかくその場所から離れたかった。妻も子供も元気だが、あの日のことは誰にも話してはいない。なぜか話してはいけない気がしたから。今日は東京でも珍しく雪がちらついている。あれから3年。どうしても忘れられずに今、こうしてパソコンに打ち込んでいる。それで何かが変わる気がしたのだ。パソコンを閉じ『そろそろ寝るか』と全てを書き終え、妻と子供の寝ている部屋に行こうとした時、突然ベランダの窓が開き、あの者が部屋へと入ってきた。ここは5階。有り得ない。そんなことを考え

ながら、私の意識は失われた。翌朝、妻は私の冷たい屍を見つけることだろう。私には薄々分かっていたのだ。あの者が雪女だと・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4719d/>

冬の出来事

2011年1月27日11時01分発行